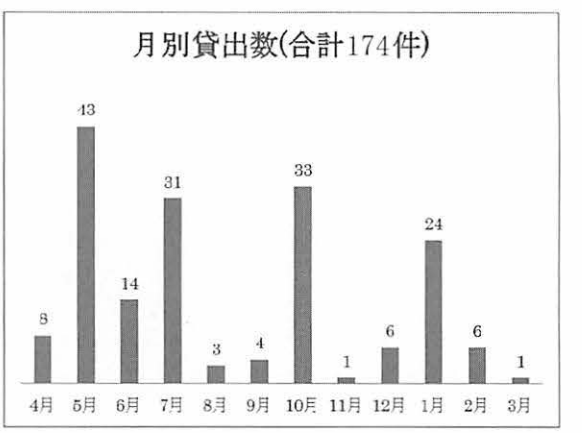
3．学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供

ボランティア・NPO活動センターでは、学生スタッフが中心となり、ボランティアの第一歩となるような活動や啓発の場を提供しています。センターでは、日常的、定期的に行えるボランティアを数多く紹介、また、学生が社会の課題に気づけるようなイベントを学内で実施して、ボランティアの裾野が広がることを目的として活動しています。

事　業　名	リユース傘貸し出しプロジェクト
実　施　日	2014年4月1日（火）～2015年3月31日（火）
場　　所	ボランティア・NPO活動センター　深草キャンパス事務室内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
利用者数	延べ174人
企画メンバー（学生スタッフ）	山本　翔、白土　奈央、永田　紗瑛、松本　惇宏、梅川　翔太、黒瀬　智加、中村　太紀、木谷　翔太、福井　貴登、藤野　優祐、上野　翼、田中　敬子、高野　喜暉、森　直樹、永翁　ふみな、藤岡　舞、米山　真奈美、山本　富美子、田中　典子

■経緯・目的

リユース傘貸し出しプロジェクトの内容は、にわか雨など突然の雨が降った場合、傘を持ってくるのを忘れた学生や教職員に傘を貸し出すことです。落し物の傘を再利用することで、学生等が雨に濡れるのを防ぎ、また、同時に傘を貸し出す際に、ボランティア・NPO活動センターの知名度の向上も図れるとして、当プロジェクトが始まりました。



■概　　要

1．貸し出しまでの流れ

①センターに傘を借りに来た方に身分証明証を提示してもらい、貸し出し用の傘の中から借りたい傘を選ぶ。

②学生スタッフが傘の貸し出し表に日付、利用者の学籍番号、氏名、貸し出す傘の個体番号を記入する。

③返却が遅れた場合のために、利用者に電話番号を貸し出し表に記入してもらう。

④学生スタッフが貸し出しの期日が貸し出し日から一週間後であることを伝え、その日までに返却していただけるように説明する。

2．貸し出し用の傘について

当プロジェクトで使用する傘は本学学生部に届けられた落し物の傘で、持ち主が見つからないまま一定の期間保存され、引き取りの見込みが無くなったものを提供してもらっています。これらの傘に管理担当者が個体番号を記したテープを貼り、貸し出し用の傘としています。

3．期日を過ぎても傘の返却がない場合

一週間を過ぎて返却がなされなかった場合は、こちらから利用者の電話番号に連絡します。対応方法としては、利用者にリユース傘を、三日後までにセンターまで持ってきていただくように伝える。もし、リユース傘を失くされていた場合については代わりの傘を同じく三日後までに持ってきていただくように伝える。

※傘の盗難や、不慮の事故により傘が壊れた等の理由により返却が不可能となった場合には柔軟に対応する。

■広報方法とリユース傘貸し出しデータ

1．広報方法…立て看板を21号館下に設置、ボラゴンに記載、またポスターやチラシを掲示板に張り出した。

2．リユース傘貸し出しデータの収集・集計

■参加者の声・得られた成果など

・傘の貸し出しと同時にセンターの広報を出来る限り行う必要があるが、貸し出した学生スタッフによって差がみられる。

■学んだこと・今後の課題

長年続いているリユース傘貸し出しプロジェクトによって、センターの知名度アップにも少なからず貢献できたのではないだろうか。しかしながら、傘もささず、雨に濡れながら帰宅していく学生を多く見かけるので、これからもそういった学生等に利用してもらえるよう、広報に力を入れなければならない。

〈報告者：山本　翔〉

事　業　名	深草広報誌「ボラゴン」の発行
配布期間	2014年4月1日（火）～2015年3月31日（火）
場　　所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）学生スタッフ広報班
企画メンバー（学生スタッフ）	森本　浩司、山口　駿、田中　奏多、小山　由貴、平舗　眞子、小田　美紀、中北　梢梶　りつ子、西角　真子、南山　裕紀、新川　貴大、橋本　望海、石川　真帆、大矢　誠志、百済　圭吾、根縫　凌馬、峰松　優丞、吉水　崇博、前田　剛志

■経緯・目的

ボランティア・NPO活動センター（深草）の学内での認知度向上のため、学生スタッフならではの目線で広報誌を作成しています。

センターの活動や企画を掲載することで、本学学生にセンターのことを知ってもらうきっかけを作り、一人でも多くの学生にボランティアに興味を持ってもらうことを目的としています。

■概　　要

●4月春号（1800部発行）

内容：ボラセン紹介
　　学生スタッフ募集
　　ボランティア体験談
　　私のオススメボランティア
　　傘と本の貸し出しについて

●6月夏号（500部発行）

内容：ボラセンとは？
　　ふかくさプチ100円商店街報告
　　ボラデビュー報告
　　1回生ボランティア感想

●10月秋号（500部発行）

内容：Twitter of ボラセン
　　龍谷祭展示
　　サマーフェスティバル報告
　　夏合宿報告
　　東日本大震災復興支援ボランティア報告

●1月特集号（200部発行）

特集！！好きから広がるボランティア

内容：「京都が好き」「福祉に興味がある」「スポーツが好き」「子どもが好き」「家でもできる」をキーワードにしたユニークなボランティア活動を紹介。

■参加者の声・得られた成果など

・広報誌を見てセンターに来室した学生や、広報誌を通してセンターの存在を知った学生が学生スタッフになるなど、認知度向上につながったと実感しています。

・1月号では、今までと編集方針を少し変え、特集号として、アタックボラセンと連動させて、ボランティアの多様性を伝える記事を掲載することにしました。その記事を作成する過程で、広報班のメンバーがボランティアの多様性を学ぶことができ、読者に伝えるため

の工夫ができました。

■学んだこと・今後の課題

- 本学学生に一番知ってほしい学生スタッフ企画のボランティア募集の記事をあまり載せることができませんでした。記事の完成がボランティア募集の期限に間に合わなかったからです。事前に企画があることは把握できているので、広報班のメンバーだけではなく、企画担当者に記事作成の依頼をするなど、タイムリーな情報が掲載されるよう、作成スケジュールの工夫をしたいと思います。
- 秋号では大学祭の来客者に配布しました。しかし、「ボラゴン」は本来、学生を対象にした広報誌です。一般の人への認知度向上には成果をあげましたが、本来の対象である学生へのアプローチは弱くなってしまったと感じています。学生だけに配ることができる授業実施日にも配布すれば良かったと思っています。
- 広報誌をみてセンターに来室してくれた学生の数を把握することができませんでした。方法としては、コーディネート中にセンターを知った媒体は何であったかを聞くなどの工夫をすることができたのではないかと思います。

〈報告者：森本　浩司〉

事　業　名	瀬田広報誌「Volunteer News」の発行
場　　所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）学生スタッフ広報班
企画メンバー（学生スタッフ）	南　伸之介、小川　菜緒、小林　陽太、仲田　匡志、春本　真也、西川　由浩、清水　謙太、田村　奈生、長友　沙樹、佐久間　涼、福納　知香

■経緯・目的

ボランティア・NPO活動センター（瀬田）では、学内での認知度向上と、より利用しやすいセンターを目指して、学生スタッフの目線ならではの広報誌を2009年度より発行しています。

センターの活動や企画、また学生スタッフのボランティア体験を親しみやすく記事にし、本学学生にセンターのことを知ってもらい、1人でも多くの人にボランティアに興味を持ってもらうことを目的としています。

■概　　要

●春号（2000部発行）
・配布時期（4/2～4/8　4/30～5/5）
・センターの紹介　・学生スタッフの紹介
・学生スタッフ募集

●夏号（660部発行）
・配布時期（7/14～20）
・夜市・大津祭の報告　・センターの紹介
・夏休みにおすすめのボランティアの紹介

●秋号（600部）
・配布時期（10/27～31）
・センター紹介
・センターにある図書の紹介
・夏のボランティア体験記
・秋におすすめのボランティアの紹介

●冬号（400部）
・配布時期（1/6～9）
・センター紹介　・ボランティアあみだくじ
・センターおすすめのボランティアの紹介（大津100円商店街、そなえパークの日、スタディツアー）

○設置場所

ボランティア・NPO活動センター（瀬田）や、学友会パンフレットスタンドに配架、学生スタッフによる手配りで配布しました。

■参加者の声・得られた成果など

今年は、センターに多くの新しい学生スタッフが仲間入りしました。これは新歓期間に広報誌を新入生に大量に配った効果だと思います。また、「配布されていた広報誌を見ました」や「広報誌の中のボランティア募集の記事を見て、ボランティアに応募しました」と言ってセンターに来室する学生もいました。苦労して作った広報紙が、センターの認知度の向上に貢献できていると思います。

■学んだこと・今後の課題

○良かった点

記事の作成から修正を経て、印刷・折り込みまでにもっと時間が必要という意見から、記事作成の期間を長くとり、製本や配布期間を見越したゆとりのあるスケジュールを組むことで、余裕のある活動ができました。記事の内容やレイアウトなどをミーティングで話し合いを深め工夫することによって、読み応えのある記事を作ることができました。

○反省点・今後の課題など

手配りする際のシフトに入る学生スタッフが年間を通して少なく、広報紙の役割を考えつつ、どうすれば学生スタッフのモチベーションを上げることができるかという課題が残りました。Facebook や Twitter という SNS の運営も始まり、広報の場が広がっている今、どのように活用していくか、学生スタッフ全員で考えることが必要です。企画メンバーとしてその先頭に立ち、学生スタッフ一同これからも努力していきたいと思います。

〈報告書：福田　七海〉

事　業　名	ボランティア募集団体合同説明会　～あなたもレッツ！ボラデビュー～
日　　時	2014年6月11日（水）、6月12日（木）12時15分～15時00分
場　　所	深草キャンパス　22号館107教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
来場者数	122名
企画メンバー（学生スタッフ）	峰松　優丞、山口　駿、森本　浩司、田中　奏多、依田　匡史、中北　梢、山本　翔、永田　紗瑛、藤原　恵太、中村　勇介、黒瀬　智加、石野　遼平、白土　奈央

■経緯・目的

ボランティアコーディネートをしていると、ボランティアには興味があるけど、最初の一歩が踏み出せないという声をよく聞きます。そこで、学生が団体の方から直接説明を聞く機会を作ることで、その不安を取り除くことができると考え、実施しました。会場内に多種多様なボランティア募集団体を集めることで、学生がボランティアの多様さに気づく機会にもなります。また、イベントとして行うことで、学生の目を引き、ボランティアに興味を持つ学生を増やすことも目的としました。

■概　　要

①当日の流れ

10：45～　会場準備
11：30～　団体準備
12：15～　開場
15：00～　団体片付け
15：30　　あいさつ・解散

②参加団体一覧

【6月11日】

- 特定非営利活動法人 洛中洛外
- 特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば
- 公益財団法人 京都市都市緑化協会
- 京エコロジーセンター（伏見をさかなにざっくばらん、伏見エコライフプロジェクト）
- 一般社団法人 京都ボランティア協会
- 特定非営利活動法人アクセス―共生社会を目指す地球市民の会
- 一般財団法人 京都 YWCA
- 京都老人福祉協会 稲荷の家ほっこり、墨染ほっこり
- 社会福祉法人 ももやま福祉会ぐんぐんハウス
- 京都ローターアクトクラブ
- 宇治ボランティア活動センター

【6月12日】

- 湖南市国際協会
- 京都市砂川保育所
- 京都府京都文化博物館 学習普及支援室
- 社会福祉法人みんななかま
- 小倉山百人一集の会
- タンタンおもちゃライブラリー
- ボランティアサークル「プラネット」
- 社会福祉法人 京都市左京区社会福祉協議会
- 京都市ユースサービス協会

■参加者の声・得られた成果など

①参加学生からの声

- 様々なボランティア団体の方とお話ができてよかった。
- 団体さんから直接お話を聞くことができた。
- 今まであまり知らなかった分野のボランティアのお話も聞くことができた。
- 親切に、わかりやすく教えていただき、活動に興味がわいた。

②参加団体からの声

- 多くの参加者が興味深く話を聞いてくれて、センターでチラシを配架するより効果的だった。
- 真剣に話を聞いてくれる学生が多く、説明をするなかで新しいアイデアが生まれた。
- いろんな学生と話せてよかったが、手ごたえがなかった。
- ぜひ来年もやってほしい。もう少し早い時期（5月とか）だともっと新入生が来るのでは？
- この時期だけでなく、冬にもやってほしい。

③得られた効果

アンケート結果から、ボランティアに興味はあるが、なかなか一歩踏み出すことができない学生が多くいるということを改めて感じた。そのような学生が一歩を踏み出すためのよい機会になったとも感じた。また、事前に参加団体の施設見学もさせていただき、学生スタッフも団体のことを知るよい機会となった。

■学んだこと・今後の課題

①学んだこと

- 団体に協力していただく企画なので、決まったことや変更点、団体からの質問に対してすばやく連絡をすることの重要さを学んだ。
- 早めに会場の下見を行い、雰囲気や設備などを把握しておくことの大切さを学んだ。

②今後の課題

- 準備が遅れ、開催時期を遅らせてしまったの

で、学生が参加しやすい時期などにもっと気を遣いたい。
- 準備期間が長かったにもかかわらず、最後の一ヶ月に慌ててしまった。早めにすべきことを把握して、余裕を持って準備に取り組みたい。
- 学生スタッフの休憩時間の確保ができなかった。

〈報告者：山口　駿〉

事　業　名	Let's ボランティア～ボランティアしようよ♪～
日　　時	2014年①4月21日（月）～23日（水）昼休み ②6月30日（月）～7月2日（水）、7月4日（金）昼休み ③9月29日（月）、9月30日（火）、10月2日（木）昼休み ④12月17日（水）～12月19日（金）昼休み
場　　所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	来場学生数　383名（①89名、②101名、③176名、④17名）
企画メンバー（学生スタッフ）	藤村　由香、森口　堅右、越智　達也、中村　健人、山下　凌司、中川　真実、西村　若奈、小牧　裕美、後藤　和成、首藤　諭志、柏島　恵、小川　諒也

■経緯・目的

瀬田キャンパス内の人目につきやすい所にブースを設けボランティアを紹介することで本学学生・教職員がボランティアに触れる機会を作り一歩踏み出すきっかけを提供する。センターに入りにくい人、センターを知らない学生・教職員へボランティアを紹介する機会を作ることを目的に、年4回実施しました。

この企画は、2010年より継続している企画です。

■概　　要

学内の人通りの多い場所に机やホワイトボード等を用いてブースを設置し、ボランティアコーディネートを行い、ボランティアやセンター事業への参加、センターの利用を呼びかけました。

今年度は、ブースに来てもらうことに重点をおき、通りでのチラシの配布は行いませんでした。

①4月21日～23日（3日間）

入学直後の新入生を中心に、ボランティアやセンターの存在を知ってもらうとともに、ボランティア・NPO 活動センターの活動を広報し、今後の利用につなげることを目的に活動しました。

ボランティアの雰囲気をより伝わりやすくするため、パネルを作成しました。

場所：樹心館前　　来場者：89名

案内用立て看板に関するアンケートを実施したところ、立て看板を見たことがない人が52人、ある人が11人という回答でした。

また、ブースでのボランティアチラシの配布数をカウントすることで、人気のある分野の調査を行いました。その結果、子ども・動物・環境・地域分野のボランティアが特に人気があると分かりました。

②6月30日～7月2日、7月4日（4日間）

夏休みに参加できるボランティアを中心に紹介しました。また、学生スタッフ企画である夜市・大津祭・ワークで学ぶ貧困問題と連携して広報を行いました。

6月30日には大津祭の広報のために特定非営

利活動法人・大津祭曳山連盟から3名の方に来ていただき、お囃子の演奏を行っていただきました。留学生が飛び入りで演奏に参加するなど、お祭りの雰囲気を感じてもらうことができました。また、季節のイベントとして七夕の笹を設置し、ブースへの呼び込みに活用しました。
場所：青志館前　　来場者：101名

4月の立て看板に関するアンケート結果を受け、この回は立て看板を設置せずに行いました。

③9月29日、9月30日、10月2日（3日間）

学生スタッフの実際の体験を伝えられるボランティアや、今まで紹介できていない分野のボランティアを中心に紹介しました。9月30日には「ツナミクラフト」に来ていただき、復興支援事業である「さをり織り」を紹介、10月2日には「紀の国わかやま大会実行委員会」に来ていただき、着ぐるみで呼び込みするなど、体験型のボランティア啓発を行いました。手持ち看板の数を増やすなど呼び込みに集中し、期間を3日間に短縮し2箇所同時で実施しました。
場所：樹心館前、青志館前　　来場者：176名

④12月17日～12月19日（3日間）

冬休みに参加できるボランティアを中心に紹介しました。また学生スタッフ企画である大津100円商店街と瀬田コミュニティ企画と連携し、広報を行いました。

ブースに展示するチラシを10種類ごとに集め、セットにすることで来場者が効率的にチラシを閲覧できるようにしました。
場所：樹心館前、青志館前　　来場者：17名

■参加者の声・得られた成果など

【学生スタッフの声】

- 新入生がボランティアに積極的でとても驚いた。（4月）
- 季節のイベントチラシを配布することでブースのアピールができ、来場者数の増加につながった。（7月）
- 関係団体と連携することでボランティアについて知ってもらえた。（11月）
- ボランティア体験ブースとチラシブースとのバランスが難しかった。（11月）
- 天候や気温により屋外に学生が少なく、あまり呼び込めなかった。（12月）

【得られた効果】

2010年より年2回実施、昨年は年3回実施して来場者数が増加したので、今年度はさらに回数を増やし年4回実施しました。来場者の数が大幅に増加し、ボランティアに興味のある多数の学生・教職員に対してボランティア紹介とセンターの広報を行うことができました。期間外に来室した学生から「Let's ボランティアを見て来ました」という声をいただき、センターの広報につながっていることを実感しました。

■学んだこと・今後の課題

- 学生スタッフ企画や関係団体との連携など新しい試みに挑戦したことで、多様なボランティア啓発ができ、来場者数の増加につながりました。
- 例年に比べ、紹介するチラシの種類を増やし、様々な分野をブースに設置したことで、学生スタッフ内で内容に関して認識の差があったことから、準備段階で情報共有の方法を見直していく必要があると感じました。
- ボランティアの人気分野の調査を毎回行っていましたが、実際にボランティア活動への参加につなげるために調査結果をどう活用するのかを、しっかりと考えていきたいと思います。
- 案内用立て看板について、4月にアンケートを実施した結果、認知度がよくありませんで

した。このことから、6月は設置をせず9月は設置をして、来場者数がどれほど変動するのかを調査しました。今回の調査結果を踏まえて、案内用立て看板の設置の有無について今後検討していきたいと思います。

〈報告者：小牧　裕美〉

事　業　名	深草龍谷祭への出展　Find Your Color　～広がるボランティアの世界～
日　　時	2014年10月31日（金）10時00分～17時30分 2014年11月1日（土）10時00分～17時30分 2014年11月2日（日）10時00分～14時30分
場　　所	深草キャンパス　22号館107教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）
来場者数	1日目193名 2日目180名 3日目237名　　計610名
企画メンバー （学生スタッフ）	中村　勇介、石野　遼平、岩本　奈子、梶　りつ子、串　祐季、白土　奈央、 中村　太紀、福井　貴登、山口　磨由子、依田　匡史、石川　真帆、 髙野　喜暉、田中　敬子、田ノ上　優光、津田　莉沙、永翁　ふみな、 橋本　望海、藤岡　舞、南山　裕紀、米山　真奈美

■経緯・目的

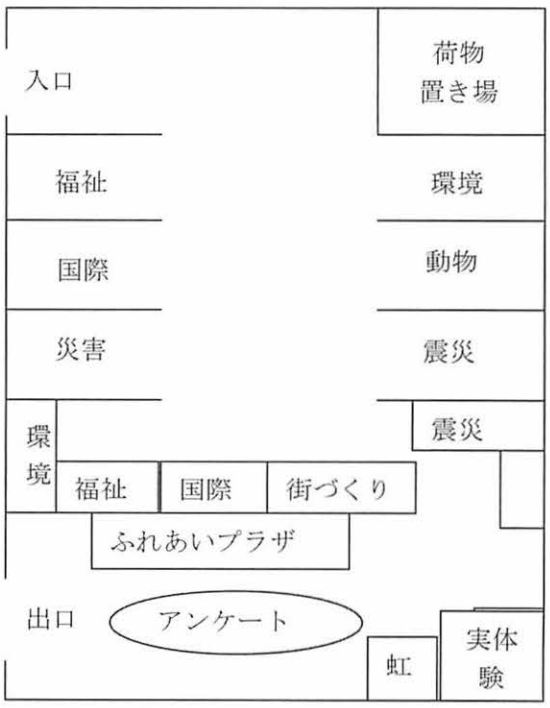
「アタックボラセン26」等の活動を通して、学生スタッフと学生との間に、ボランティアに対するイメージの違いがあることに気がついた。そのため、龍谷祭を通して来場者の方々にボランティアに対する視野を広げてもらいたいと感じた。

龍谷祭は様々な年代層が来場し、ボランティアのイメージチェンジに繋げることができる大きな機会である。これをきっかけに来場者の中でも、特に潜在層をターゲットに、「ボランティアは特別な人だけがするものではない」「誰でもどんな人でもボランティアはできるのだ」ということを発見してもらい、身近に感じてもらうことで、イメージチェンジにつなげる。こうして、ボランティアの多様性を知ってもらう。

■概　　要

ボランティアのイメージチェンジによって身近に感じてもらうために、段階を踏んで展示を行った。教室を大きく2つに分けて、前半では、1回生を中心にブースを6つ（環境・福祉・国際・動物・災害・震災）作って、各分野のボランティアをする上での楽しさや魅力などを模造紙4～5枚程度にまとめて展示した。後半では、2回生を中心に各分野（環境・福祉・国際・震災・街づくり）の団体に所属する学生や、ボランティアを経験した学生にインタビューすることで、来場者の学生により身近に感じてもらえる展示をした。

最後に、展示を見て回っての感想や、今後のボランティアに対する考えなど一言を、手のひらサイズに作った星型の画用紙に書いてもらい、Find Your Colorという名の「虹」を完成させることで、視覚的に成果がわかるようにした。



■参加者の声・得られた成果など

【来場者へのアンケート集計】

①性別：男性　124名／女性　168名

②所属：学生　103名／一般　189名

③ボランティア経験：有　110名／無　164名

④センターのことを知っていたか：知っていた　146名／知らなかった　145名

⑤展示の量は適当だったか：はい　269名／いいえ　23名

⑥展示の内容の難易度は適当だったか：難しい　21名／適当　261名／浅い　8名

⑦学生スタッフの対応は：とても良い　178名／良い　112名／悪い　1名／とても悪い／0名

⑧展示を通してボランティアに対するイメージに変化はあったか：とても変わった　43名／変わった　125名／少し変わった　81名／変化無し　38名

⑨満足度：平均86％

【感想】

- ボランティアがこんなにたくさんあるなんて知らなかった。
- 会場の雰囲気が明るくて面白かったです。
- 東北の震災のことをこれからも忘れることなく気にかけていきたい。
- 新聞紙スリッパを作るのが楽しかった、もう1度作ってみたいです。
- もっと深くまで知れる展示にしてほしかった。

■反省点

【準備段階】

- 各ブースの内容を、学生スタッフ全体で共有すべきだった。
- 1回生、2回生でブースを分けるのではなくて、分野ごとに分ければわかりやすくなった。
- ポップの色塗りや模造紙の作成がなかなかうまくいかず、当日直前まで切羽詰った状態になってしまったので、もっと余裕のあるスケジュール管理をすべきだった。

【当日】

- コアメンバーだけでなく学生スタッフ全員が同じレベルの説明ができるようにするべきだった。
- 2回生のブースが通路のようになっていて、せっかくの展示を見ずに通過されることが多かった。
- 天井に貼ったポップが、何個か落ちたりして少し危なかった。
- 全体的にブースが狭かったので、事前にしっかりと会場を把握してブース配置をすべきだった。

■学んだこと・今後の課題

アンケート結果から、展示の量や内容が適当だったと答えた方が多数いたので、来年度以降も参考にしたい。またイメージが変わったと答えた方が86％だったことから、目的である「ボランティアのイメージチェンジ」を達成できたと思う。

学生スタッフ一人ひとりのボランティアに対する知識が、龍谷祭の取り組みによって格段に増えた。来場者に対して展示物の内容を説明し、質問に答えることで、龍谷祭前と比べてコーディネーション力の向上に繋がった。改めて伝えることの大切さを学ぶことができ、自信がついたという学生スタッフが多かった。

自分の興味のある分野に積極的に取り組み、個人の長所を活かした展示となった。説明が不安な部分については、事前にボランティア経験豊富な学生スタッフや職員から情報を聞いたり、実際にボランティアに行って取材を行ったため、内容の濃い説明ができた。来場者数も目標を大きく上回り600人を超え、目標は達成できた。

展示を見たことがきっかけでその後センター

へボランティアを探しにくる学生も複数見られたことから、ボランティアの多様性、楽しさを伝えられたと実感することができた。

来場者は、学生よりも一般の方（子ども連れや保護者層）が多く、幅広い年齢層であったことから、今後はもっと対象の幅を広げた展示にすることも検討したい。

〈報告者：中村　勇介〉

事　業　名	瀬田龍谷祭への出展　つなが輪祭！ひろげん祭！
日　　時	2014年　10月25日（土）、26日（日）
場　　所	瀬田キャンパス　3号館105教室（展示）、体育館付近（模擬店）
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	来場者数245名　（25日:135名　26日:110名）
企画メンバー（学生スタッフ）	野中　美華、小川　菜緒、西本　史佳、山下　凌司、岡本　龍吾、柏島　恵、高間　美穂、中原　茜、長友　沙樹、後藤　和成

■経緯・目的

- 来場者に、ボランティアに行きたい！と思ってもらうことが出来るように、様々なボランティア活動の魅力について伝え紹介するとともに、社会課題について啓発をする。
- 龍大生がセンターを利用しボランティア活動した時や、東日本大震災復興支援ボランティア、体験学習プログラムに参加した時に学んだことを、他の学生などに啓発することで出来たつながりを知ってもらう。
- 一般の来場者の人々に団体の登録や、ボランティア・NPO活動センターの活用を促進させるため、センター事業や学生スタッフなどについて知ってもらう。
- 学生スタッフ全員で協力し作り上げることで団結し、今後の活動に対する意欲や組織力の向上をねらう。

■概　　要

＜展示＞

- ボランティア・NPO活動センターの活動紹介
  センターの紹介、学生スタッフ、学生企画、センター事業について紹介しました
- ボランティア紹介
  ボランティアの定義・心構えや、センターの登録団体のうち4団体の団体紹介（［公財］京都市都市緑化協会、梅小路プレイパーク、日和、小倉山百人一集の会、近江ちいろば会ぼだいじデイサービスセンター虹）をしました。
- 模擬店の収益の寄付先紹介
  この企画のテーマである「つながり」に込めた私たちの趣旨目的と団体の活動に共通性を感じたため、特定非営利活動法人ムラのミライへ寄付することに決定した。団体の紹介、寄付金の使い方、模擬店出店物（タンドリーチキン）の広報を行った。
- 東日本大震災復興支援ボランティア
  ボランティアバスの説明、2014年度の活動内容、活動時の写真や参加者の感想、宮城県石巻市雄勝町について（雄勝町の名所や名産品の紹介、雄勝小学校での教訓）、津波の高さの縮尺展示を行った。
- つながりアート
  来場者参加型の展示を行った。

＜模擬店＞

- 出展物：タンドリーチキン（インド料理）
  販売数：430食
  売上金　130,300円　　収益　71,589円
  売上金から必要経費を引いた収益を、特定非

営利活動法人ムラのミライに寄付する。

■参加者の声・得られた効果など

【参加者の声】

＜展示＞

- つながりアートは面白いアイディアであった。
- 津波の高さの縮尺を見て震災の恐ろしさを再確認できた。
- 東日本大震災復興支援ボランティアをされていることに関心を持った。
- 龍谷大学はボランティア活動を積極的に取り組んでおり、学生に向けてボランティア啓発にも取り組んでいるのがわかった。
- 様々なボランティア活動に参加されているのがわかり、ぜひボランティアに行きたいと思った。
- ボランティアって身近にいっぱいあって堅苦しいことはないのだと思った。
- 気軽にボランティア・NPO活動センターを訪れようと思う。

＜模擬店＞

- 値段は高かったが、他に出店されていなかった商品でおいしかった！
- 寄付先であるムラのミライの説明や展示の案内があったので、待ち時間も退屈しなかった。
- 列整備が不十分であったので、他店舗に迷惑をかけた。

【得られた効果】

- 龍大生や地域の方々など多くの来場者に、ボランティア・NPO活動センターを知ってもらうことができた。
- 様々な分野のボランティア活動を紹介することで、来場者のボランティアに対するイメージを変えることができた。
- 来場者だけでなく学生スタッフも国際社会に目を向け、国際問題や国際協力への取り組みに触れる機会になった。

■学んだこと・今後の課題

＜展示＞

- 龍谷祭でたくさんの方に来ていただいたことで、日頃関わりがある学生以外の人にセンターの活動内容や社会問題について知ってもらうことができた。学生スタッフが意欲的に展示製作に関わり、当日も積極的に来場者に対して展示物の紹介を行えたことから、趣旨目的の1つである学生スタッフの団結を感じられ、組織力の向上につながった。展示の内容も工夫しこだわりを持った展示になった。しかし、準備期間が短かったために、内容の把握不足が起こった。さらに学生スタッフや職員との共有・連携不足も加わり製作進捗が遅れてしまった。毎年の反省点であるが、計画性や余裕をもって取り組むべきである。昨年度の反省点・改善案を前もって確認し活用していれば、もっと効率よく進められたのではと思う。これらの反省から、毎年実施する企画は、前回の振り返り、反省点をよく確認してから取り組むべきだと思う。
- 龍谷祭実行委員会の企画として行われていたスタンプラリーに関して、学生スタッフ全員がしっかりと内容を把握できていなかったので、事前に情報共有する時間、場所を持つことが大切である。
- 来場者の「センターのことをよく知れた」「ボランティアに行きたい」といった感想により、センターの周知ができたことがわかる。一方、社会課題についての啓発が弱くなってしまったという反省がある。また主に1回生学生スタッフが中心になって活動したため、学生スタッフ自身の知識量も不足していたと感じた。今後の活動にこの思いを活かし、全体の力量を向上させたい。

＜模擬店＞

- 過去2年は、復興支援にかかわる宮城県石巻市の団体に模擬店の収益の寄付を行ってきたが、今年度は、国際関連の団体に寄付したいという意見が出た。一方で東日本大震災を風化させたくないという思いもあり、なかなか寄付先を決めることができなかった。最終的

には全員で話し合って「ムラのミライ」に決定したのだが、時間をかけることで寄付先を決める過程を大事にできた。

- 出店物であるタンドリーチキンは焼き上がるのに時間がかかり待ち時間が長くなってしまったが、珍しい料理であったため注目され大変盛況であった。
  待ち時間を利用して、寄付先である「ムラのミライ」の活動目的や内容を紹介したのだが、企画メンバー以外の学生スタッフにこの団体の活動内容の周知が行き届いていなかったため、活動背景にある国際問題を知ってもらうまでの十分な説明ができなかった。
- 龍谷祭の企画に限らず、学生スタッフの活動に対する思い・モチベーションは人それぞれ違っている。今回の企画を通して、それぞれの活動への思いを向上させる仕掛けをつくることができたと思う。龍谷祭で得た団結力、意欲向上の成果が今後の学生スタッフの活動の中で目に見える形で現れることを期待している。

〈報告者：高間　美穂〉

事　業　名	ワークで学ぶ　貧困問題　～アナ（た）と世界の状況 don't let it go!～
日　　時	2014年7月18日（金）17時20分～19時30分
場　　所	瀬田キャンパス　学生交流会館カンファレンスルーム
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	25名（うち学生スタッフ16名）
企画メンバー（学生スタッフ）	石原　國雄、歌藤　智弥、木村　直人、樋口　朝香、野中　美華、小川　諒也

■経緯・目的

貿易ゲームというワークショップを通じ、現代の経済の国際化、貿易から生まれる貧困問題についての関心と理解を深める。また、国際社会への視野を広げ、貧困問題を自身の身近なものとして感じることで、日常生活で学生自身ができることを考えてもらいたいと実施した。

また、ボランティア・NPO 活動センターの活動を本学学生らに身近に感じてもらい、海外体験学習プログラム等の国際関係ボランティアに対して興味・関心をもってもらうことを目的に実施した。

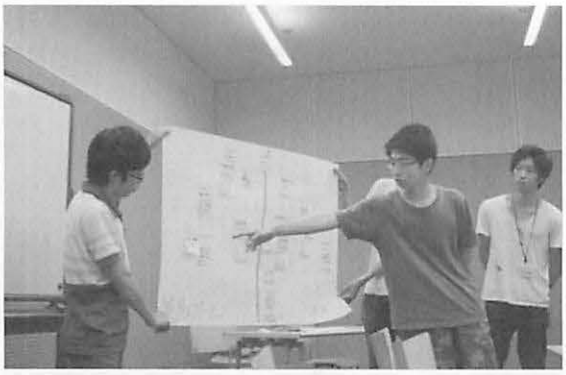
■概要

- アイスブレイク「共通点探し」
- ワークショップ「貿易ゲーム」
  →資源や技術を不平等に与えられたグループ（国家）間で貿易し、お金を稼ぐゲーム。ゲーム中に発生したことを世界経済と重ね、仕組みと問題点を理解してもらう。
- 貿易ゲームの解説
- グループワーク
  →ゲームで起きたことを元に、グループで自分たちにできることを話し合ってもらう。
- 国際関係のボランティア、団体の紹介

■参加者の声・得られた成果など

- 紙やはさみなど、身近なものを使ってのゲームを通じて、自分も国際社会の一員であることを理解できた。
- 自分が貧困国の立場に立って解決しようと考えても、なかなかうまく物事が進まないことがわかった。
- 初対面の人との交渉が難しかった。他の参加者との交流が初めのアイスブレイクの中にあってもよかった。
- 国家間の課題を具体的にイメージできるようになった。

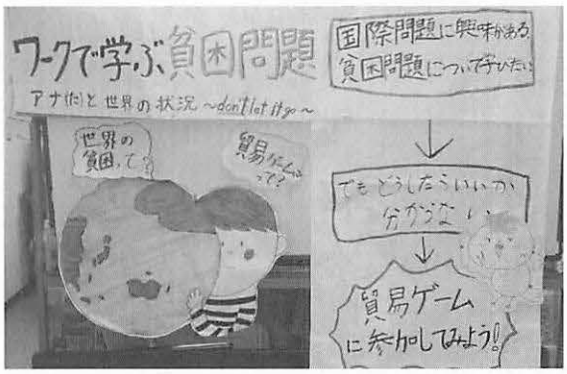
- 持っている物の差、勝ち負けによって貧富の差が生まれるということをワークショップで体験的に学び、現実の世界にあてはめ考えることができた。
- 実際は先進国に住んでいるので、現場に行って体感しなければ理解できないと思った。



■学んだこと・今後の課題

- 貿易ゲームを行うことで、学生に世界の貧困問題や国際問題を身近に感じてもらい、考えてもらうきっかけになった。貿易ゲームで発生した問題を現在の国際社会の問題と照らし合わせて説明を行うことでさらに関心を持ってもらうこともできた。そして学生同士で、「今、世界の貧困問題に対して自分たちには何ができるか」を話し合ってもらい、「ボランティアをする」や「現地に行って活動する」などの意見が生まれ、国際関係のボランティアに対して興味を持ってもらうことができた。しかし、「貿易ゲームはゲームであり、身近に感じられなかった」や「国家間の問題であり、自分にできることは見つからなかった」などの意見もあり、もっと身近に感じてもらい、自分にできることを考えてもらうための説明やワークが必要であった。2時間という短い時間の中で参加者に経済の国際化、貧困問題を理解してもらい、自分は何ができるかまで考えてもらうことは非常に難しいと感じる。1度きりでなく、継続して活動していく必要がある。
- 学生への参加呼びかけには様々な手段を試みたが、内容や質が伴わず、予定の募集定員に達することができなかった。一目見て内容もわかりやすく、人を引き付ける広報を行っていく必要があると感じる。
- 準備段階で企画メンバー一人一人の役割分担に偏りが生まれ、個人の負担が大きくなったことやミーティングの効率が悪かったなどの問題があり、企画メンバー間での情報共有や計画的な準備の必要性を感じた。

〈報告者：木村　直人〉



事業名		サークル活動・ボランティア活動　情報交換会＆地域活動支援	
サークル情報交換会	キャンパス	深草キャンパス	瀬田キャンパス
	実施日時・参加人数	5月8日（木）7団体10人 7月9日（水）1団体10人 9月26日（金）2団体7人 11月19日（水）2団体5人 15年1月13日（火）3団体5人 いずれも12時30分～13時00分	5月8日（木）7団体14人 7月9日（水）9団体13人 9月26日（金）1団体7人 11月17日（月）4団体8人 15年1月13日（水）2団体7人 いずれも12時50分～13時20分
	場　所	ボランティア・NPO活動センター	ボランティア・NPO活動センター
登録団体		学友会学術文化局ボランティアサークル 学友会学術文化局交響楽団 学友会学術文化局マンドリンオーケストラ 学友会体育局少林寺拳法部 一般同好会手話サークル 京炎そでふれ!輪舞曲 ジャズ研究会 Broad Wey musical circle 落語研究会	マジック&ジャグリングサークル　MIST そでふれよさこいサークル　華舞龍 社会福祉研究会 S.W.A.P 沖縄三線サークル　うみんちゅ Sept Couleur　（セプト　クルール） No Animal ―No Life 手話サークル（D.A.Y） アコースティックギターサークル音×音 アカペラサークル MOUSA（ムーサ） 学生交流サークル　FuiNee ちっちの輪
		計9団体	計11団体
地域から	依頼数	24件	55件
	成立数	12件	25件
実施主体		ボランティア・NPO活動センター	

■経緯・目的

学内のサークルにおけるボランティア活動の促進を目的とし、学内サークルとの連携強化、学内でのセンターの認知度向上、サークルの地域活動のサポートなどを目指している。

■概　要

●サークル登録制度

地域からの「サークルを紹介してほしい」などの依頼に対応するため、学内のサークル（宗教局、放送局、学術文化局、体育局、各種委員会や一般同好会）のうち希望するサークルが登録を行っている。

※ボランティア活動以外のサークルも登録対象。

●サークル情報交換会

定期的に実施し、サークル同士のネットワークづくりやサークルの活動に役立つ情報提供を行っている。

具体的にはセンターの活動紹介、助成金の情報提供、サークルの特技を活かした地域でのボランティア活動などの説明を行い、新規登録サークルの呼びかけも行った。

■参加者の声・得られた成果など

参加サークルから「地域での発表の場を紹介してほしい」、「助成金に応募して今後の活動に活かしたい」などの声があり、地域の団体からの出演依頼などの情報を伝え、マッチングすることができた。サークルとの日程調整や、助成金の情報提供を随時行い、実施後の双方へのヒアリングなどもこまめに行うように心がけ、SNSで活動報告を発信することができた。